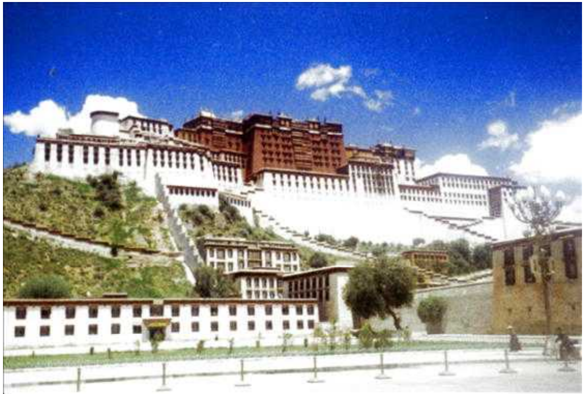

懐かしのチベット

髙野敦志

目次

いざ、チベットへ出発！ 1
ツェタンで会ったチベット人 9
蔵王墓とユムブ・ラガン 23
サムイェ寺とヤムドゥク湖 40
チベットの都ラサへ 61
ダライラマのポタラ宮 75
さらば、チベット！ 85
ラサから西安へ 97
チベット入国者の先駆け 110
河口慧海の『チベット旅行記』について 113

あとがき　117

いざ、チベットへ出発！

一九九九年七月三十一日午前十時、成田空港を離陸したジェット機は、南アルプス上空を通過し、福井付近で日本海に出た。隠岐（おき）の南を飛行した後、雷雲を避けながら韓国南部を通り、中国西安（せいあん）に着陸したのは、現地時間の午後一時過ぎ。時差を考えれば、約四時間で唐の都長安だった街にすっ飛んだことになる。

上空から見た空港の周辺は、畑と剥（む）き出しの赤土。多少林らしいものは見えるが、どこまでも平地が続いている。西安の市街と空港は、かなり離れているらしい。タラップを下りると、満員のバスに詰め込まれて発車。バスには冷房がなく、運転手が前方のドアを、足で開けたまま走っている。

空港の中は飾り気がない。入国手続きを待っているのは、大半が日本人だった。「熱烈歓迎」の文字が見える。漢字だらけなのは当然だが、日本人の感覚からすると、何でも大げさに感じられてしまう。ただし、現在使われているのは簡体字だから、中国語を勉強したことがない日本人には、暗号のように見えるかもしれない。

僕がチベットに興味を持ったのは、大学に入ったばかりの頃だった。『バルド・ソドル』という「チベットの死者の書」を読んだのがきっかけだった。仏教の経典（きょうてん）のはずなのに、収録された壁画に描かれているのは、女神とセックスしている仏たち、いわゆる歓喜仏（かんぎぶつ）が中心である。しかも、人間が死んでから

中有（ちゅうう）でさまよう間、体験することが書かれていた。

実は、『バルド・ソドル』自体は、チベット仏教の古派、ニンマ派の行者（ぎょうじゃ）の体験を記したもので、インドで作られた経典（きょうてん）のみを正典（せいてん）とするならば、偽経に分類されるものである。ただし、心理学者のユングも、人間の深層心理を記録したものとして、高く評価しているので、謎めいた世界の魅力が揺らぐわけではない。

昔も今も、チベットに行きたかったら、中国を経由しなければならない。中華民国の時代までは、中国の保護国並みの扱いで、ダライラマによる祭政一致の体制が続いていた。中国人民解放軍がチベット全土を制圧し、ダライラマ十四世がインドに亡命してからは、チベットの中国化が押し進められている。い

ずれにしても、チベットを体験するには、中国を避けては通れない。

西安の空港に現れたおじさんガイドは、日本語も英語も話せなかった。やむなく、中国語で筆談することにした。英語ができれば何とかなるという考えは甘い。中国で個人旅行するなら、中国語の片言と、一通りの文法ぐらい習得しておいた方がいい。かろうじてコミュニケーションがとれ、成都（せいと）行きの搭乗手続きをやってもらった。

成都（せいと）行きの飛行機は遅れていた。午後七時発となったが、北京（ペキン）よりはるか西の西安では、太陽がまだぎらぎら照りつけている。出発ロビーではメガホンで、紅衛兵（こうえいへい）のような女性ガイドが搭乗

を促している。軍事教練でも行っているように聞こえる。成都行きに乗る日本人は、どうやら僕一人らしい。

搭乗したものの、どこに座ったらいいのか分からない。座席番号など関係なく座っているのか？　スチュワーデスに英語で尋ねたら、空いている席に座るように促された。国内線であるため、座席と座席の間隔も狭かった。ようやく離陸したとき、夕陽は地平線と三十度くらいから射してきた。

お手ふきが出たので夕食は弁当か、と思ったら、パン三つにチョコレート、豆菓子一つ、パイナップルっていう珍妙な組み合わせ。しかも、子供の頃の給食のパンみたいに固い。機内食に期待してもしかたないか。

田園地帯と低い山並みを越えて、ようやく四川省に入った。

成都の空港に着陸したのは午後八時半。ここでは日本語が分かるガイドの女性が出てきて、地獄に仏といった気がした。広州経由で日本人の夫婦が合流するらしい。ほどなく現れたのは、三十代のYさん夫妻。気取らない、開放的な二人とは、気軽に会話が楽しめる仲になった。

　宿泊先の成都飯店までは、旅行社の車で夜の大通りを飛ばした。上半身裸で自転車に乗ってる人が見えた。中には自転車三人乗りって強者（つわもの）もいる。さすがにこれには驚いた。人が歩いていようが、のろのろ走ってる車がいようがお構いなし。クラクションをけたたましく鳴らしていく。邪魔だ、早くどけといった調子だ。

　午前四時半起床。荷物をまとめてチェックアウト。Yさん夫妻と車に乗り込み、夜明け前の交通量少ない道を、高速道路並みにすっ飛ばしていく。空港でガイドの女性に搭乗手続きをやってもらい、ホテルで渡されたパンと卵、オレンジを食べる。六時五十分発のラサ（拉薩）行きに乗った。

　搭乗した飛行機は、国際線並みにゆったりしている。欧米人の姿を中国に来てはじめて見かけた。大きな撮影機材を持ち込んでいるから、テレビ局のスタッフかもしれない。中国では空港周辺や上空からの撮影は禁止されており、特別の許可を得ているのだろう。

　離陸してしばらくすると、眼下に素晴らしい風景、ドキュメンタリーでしか見たことのない、どこまでも連なる雪山が広が

っていた。すでに夜は明けて、晴れ上がった大空からは、夏の太陽が光を放射してくる。大雪山脈からチベット自治区へと続く、青い山肌と雪のコントラスが美しい高山は、瞑想する聖者のように輝いていた！　悠然（ゆうぜん）と越えていく機体に乗った僕らは、眺めているだけで息を呑（の）み、精神を高みへ引き上げられていった。

ツェタンで会ったチベット人

ラサのクンガ空港に着陸した。当時はまだ、青海省のゴルムドからラサに至る区間の青蔵鉄道は開通しておらず、チベット高原を走る鉄道は存在していなかった。青蔵公路からバスで入る場合は、許可証がない外国人は不法行為となり、高山病にかかるリスクも高い。金銭的にかなり余裕があり、団体旅行に参加するなら、航空機並みの快適さを持つ鉄道で五千メートルの峠を越え、チベット入りするのも良いだろう。

　したがって、現在でもクンガ空港から入るのが、外国人旅行者にとっては一般的な経路と言える。とはいえ、いきなり富士山の頂上に下ろされるようなものである。高山病にかかって、

到着ロビーで吐いている日本人を見かけた。幸い、Ｙさん夫妻も僕も体に変調は来していなかったが。

今回のチベット旅行で、案内してくれるガイドは、三十歳の中国人男性梁（りょう）さん。半年しか日本語を勉強していないから、時々言っていることが分からなかったが。ただ、Ｙさんは台湾で勤務していた経験があり、中国語も流暢（りゅうちょう）に話すので、言葉で困ることはなさそうだった。

梁さんが用意した旅行社の車に乗った。道の両側には柳の木が植えられている。しかし、日本のしだれ柳とは異なり、青空に向かって枝を伸ばしている。車窓から見えるのは、岩山と剝き出しの大地、雨期には牧草などが生える程度で、乾燥した土

地で樹木が茂るのは川辺ぐらいである。

チベットの大河、ヤルツァンポ川に沿った道を進んでいく。この川はブラマプトラ川と名前を変えて、ベンガル湾に注いでいる。上流部に当たるチベットでも、川幅は五百メートルは下らない。広がっている部分では湖ほどの幅があり、水は泥で濁っているものの、ゆったりとした流れには壮大な美しさがある。

道路を羊の群れが横断している。黒い生地に刺繍（ししゅう）の入った民族服を着たチベット人のおじさんは、鞭（むち）を片手に羊の群れを追っている。おじさんが寄ってきたので「タシデレ」と挨拶（あいさつ）した。

今のところ覚えているチベット語と言ったら、それくらいだったから。ヒンディー語の「ナマステ」と同じで、いつ言って

も構わない便利な挨拶である。

羊を眺めながら、ちょっといつもと違うと感じた。何だかいい気分なのである。清酒をコップ一杯引っかけた感じだ。現実感覚は薄れているが、光や肌に当たる風には敏感で、半ば目覚めたまま夢を見ているみたいだ。

実は、これと似た感覚は、富士山の山頂近くを登っているときにも得た。酸素の濃度が低いことで、意識が変調を来(きた)したのだろうか。ランナーズハイに近いのかもしれない。

ふたたび車に乗り込み、しばらく草原に沿って進むと、チベット人の村が見えてきた。石造りの家屋で、窓にだけ木の枠がはめられている。平らな屋根では、経文(きょうもん)を記したタルチョと呼ばれる旗がなびいている。風に吹かれるたびに、仏の教えが

大空に広がり、風の声が読経(どきょう)となると、チベット人は考えているわけだ。

今晩の宿泊地、ツェタン（澤當）のホテルに入った。軽く酔ったような感覚は残っていたが、食欲はかなりある。ここチベットで幅を利かしているのは、四川省からの移民である。そのため、レストランの多くは辛みの利いた四川料理。

昼食に出された麻婆豆腐(マーボーどうふ)は、花椒(ホワジャオ)という中国山椒(さんしょう)がすごく利いているもの。舌がしびれて、スカっとした感覚が額(ひたい)から脳天に突き抜ける。味覚も違ってしまい、水を飲んだだけで柑橘類(かんきつるい)の香りを感じてしまう。

本場の汁なし担々麺が一番おいしかった。おこげも良かった

が、何しろ量が多すぎて食べきれない。中国人の習慣では、食べきれないほど出すのが、相手に対する接待なのだという。

「今日は体を慣らすために、ホテルでのんびり過ごしましょう」

ガイドの梁さんは、ホテルに戻ると、受付で枕ほどの大きさもある、ゴム製の袋入りの酸素を、僕とY夫妻に渡していった。先端から出たチューブは縛ってあり、気分が悪くなったら吸うようにということだった。また、高山病に効くというお茶、紅景天という薬草のお茶を紹介してくれた。

個室に入ると、今朝の起床が四時半だったので、ちょっぴり昼寝をした。目覚めてびっくりした。爪の色が紫色に変わっている。寝ていると血流がゆるやかになり、酸素不足が進んでしまうようだ。袋の酸素を吸って、紅景天をがぶ飲みし、蔵密気功（ぞうみっきこう）

をやったら、元気を取り戻すことができた。これはチベット密教の修行の一部を、漢族向けに簡略化し、健康法の一つとしたもの。

ホテルの外に出てみることにした。ツェタンはチベット人発祥（はっしょう）の地と言われるが、中心街はすっかり中国化されている。中国語の看板の下には、チベット語の表記もされているのだが。この街に住む過半数は漢族なのではないか。洋服を着ているのが漢族で、黒地に色糸で刺繍した民族服を着ているのがチベット人。衣装は民族の誇りなのだろう。強い紫外線で焦げ茶に日焼けし、皮膚は乾燥しきって、深い皺が刻まれている。それでいて、人なつっこい表情をしている。

　大通りは警笛が鳴り響き、トラックやバイク、自転車に人力車をつないだ輪タクがせわしく行き交(か)う。どけどけって感じだが、人も車の前を平気で横切る。他人のことなんか気にしちゃいられない。我先に出て行かなければ、中国化した街では生きていけないんだろう。
　その点、チベット人は適応できていないようだ。田舎(いなか)の住人が、都会の人間にいいようにされているって感じ。二級市民扱いされていて、鬱屈(うっくつ)していると言おうか。チベットは中国の植民地って印象なのである。
　食堂の中に民族衣装を着たチベット人の青年が立っていた。肩からダニェンというリュート型の弦楽器を下げている。通りで立ち止まって見ていると、こちらの方に寄ってきた。弾き語

りするから、カンパしてくれと言っているのだろう。
　どうやら青年は、英語も中国語も通じないようだ。せっかくだから録音しておきたいと思い、僕はお金をちらつかせ、カセットテープも見せて「いいか？」と身振りで合図した。
　青年は弾き始めた。三本の弦からシタールに似た、天上の音楽を思わせるうなりが響いた。一曲弾き終えると、僕の方をじっと見る。すぐにお金を渡さないと、今度は弾きながらチベット語で歌い出した。それは素朴な民謡調の歌で、生きるつらさと、その中で見いだした喜びを語っているように思われた。演奏が終わったとき、思わず「おう！」と声を上げて拍手した。
　カメラを向けて、ＯＫ？　と問うたが、通じない。身振り手振りでようやく、写真を一枚撮らしてもらった。財布の中を調

べたら、毛沢東（もうたくとう）の百元札しか入っていない。
まあ、いいかと思って手渡すと、青年は「僕に？」とでも言うように、驚いた表情を見せた。「いいんだよ」と言うつもりでうなずいて、さらにお札を差し出すと、信じられないという表情が、満面の笑顔に変わっていった。
そばにバイクを止めていた漢族らしい男が、「いくらもらったんだ？」と声をかけたようだ。
「おう！」
百元と言えば、日本円では千四百円ぐらいだが、ガイドの梁さんの日給が五十元だから、二日分の給料を上げてしまったことになる。

ホテルに戻って少し休んだ。先ほどまであれほど暑かったのに、灰色の雲が広がってきたと思ったら、雷鳴がして通り雨が降った。夕食は午後七時からだったが、北京時間だから、真夏の五時ぐらいの明るさである。梁さんが迎えに来てくれて、外の食堂に出かけていった。
昼間と同じ四川料理の店だった。Yさんの奥さんは頭痛とだるさがひどくて、ホテルの部屋で臥（ふ）せているとのことだった。Yさん自身も頭痛がひどく、食欲がないと言っていた。僕自身も、辛みの効いた肉炒めはおいしかったが、あとは豆入りのお粥（かゆ）、西瓜（すいか）ぐらいしか食べる気がしなかった。
部屋に戻ったが、頭痛がしてきたので、袋詰めの酸素を吸ったり、紅景天というお茶を飲んだり、少し歩き回って肺活量を

高めたりした。どうやら、高山病の症状が出てきたようである。まだどこも見物して回ったわけでもないのに、これでは先が思いやられる。チベットではまず、酸素の薄さと闘わなければならないのである。

　午前一時半頃寝たら、喉（のど）が渇（かわ）いてすぐに目が覚めてしまった。二日酔いの症状に似ている。水分を補給することにした。空気が乾燥しているだけではない。不足している酸素を、水から補おうとしているらしい。

　起き上がって紅景天という茶を飲み、横になったのだが、今度は起きているのか寝ているのか分からなくなった。寝られずにものを考えているのか、答えのない謎に煩悶（はんもん）させられ続けているのか。

　チベット仏教の寺院の壁画には、後期密教特有の護法尊（ごほうそん）、明王（みょうおう）が数多く登場する。鬼神を畏怖（いふ）させるために、多数の顔や手足を持ち、大火焔（だいかえん）を体から発している。水牛の頭をした忿怒尊（ふんぬそん）さえいる。何も知らない外国人が見たら、これぞ悪夢の世界と感じるだろう。これらの諸尊はタントラと呼ばれる経典に則（のっと）っているのだが、眠りと覚醒の境界をさまよう不眠の体験から、イメージされたものなのではないか。

　とにかく、チベットの夜は長い。一晩明けるのに三晩過ぎたような感覚。起きている間だけではなく、眠っているだけでも疲れてしまう夜が、手ぐすね引いて待っているのだ。こうなったら、寝るのをあきらめた方がましである。旅行の日記をつけていたら、時計は六時半を指していたが、まだ明け方のようで

ある。日本人の体感からすると、真夏の四時半ぐらいで、空気もひんやりしている。

蔵王墓とユムブ・ラガン

少し頭が痛かったが、かなり適応してきた気がした。Ｙさんの奥さんは顔色が良くなっていたが、ご主人の方はつらそうだった。煙草を吸ったのが良くなかったらしい。

朝食はお粥と油条（ヨウティヤオ）（揚げパン）、漬け物などで軽く済ませた。今日はまず、蔵王墓、チベット王の墓参りをすることになっている。ツェタンの街から外れると、舗装（ほそう）のされていない田舎道に入った。とにかく揺れがすさまじい。周囲はなだらかな岩山が続いており、今にも落ちてきそうな石がごろごろ、斜面にしつがみついている。

谷あいの盆地には裸麦の畑、石で囲った牧場が広がる。草を食（は）

むのは山羊と牛。荷物を運ぶのはヤク（毛牛）で、人が乗るのはロバである。チベット人の家は石造りで、出入り口と窓だけは木で出来ている。

　農家の人たちは皆チベット人で、黒地に極彩色（ごくさいしき）の刺繍の入った民族衣装で着飾っている。どうやら今日は晴れの舞台、チベット仏教のお祭りらしい。ガイドの梁さんも見るのは初めてだそうで、思いもかけない行事に遭遇（そうぐう）したことになる。

　お坊さんがチベットのラッパ、ワンドゥンを吹くと、パンチェンラマ十世の写真を乗せた御輿（みこし）が続き、村の長老や民衆が続いて、広場全体を巡（めぐ）るほどの人の輪ができた。老いも若きも総出といった感じで、中央には草を集めた壇があり、そこで護摩（ごま）

を焚（た）くのだろう。

　会う人ごとに「タシデレ」と挨拶すると、子供たちは人なつっこく近づいてくるし、お婆さんは目を輝かせてこちらを見る。

「ンガリビンネエイン」と、片言のチベット語で言ってみる。

「私は日本人です」という意味で、ここで「我是日本人（ウォーシーリーベンレン）」などと言ったら、和やかに雰囲気が台無しである。

「そうなの？」とでも言うように、お婆さんはうなずいてくれる。梁さんの話では、人々に中国語は全く通じなかったそうだ。

　この人なつっこさは、かつての日本人も持っていたもので、開国した頃に欧米人に対して示したとされるものだ。実はこの辺りは外国人未解放地区で、特別許可を得て来ているので、他国の人間を見ること自体が珍しいのかもしれない。

子供たちは盛んに手を差し出す。可愛くて愛嬌があるので、ついお菓子でもあげたくなるが、一人にあげたら集団に囲まれてしまうだろう。経済的な面から見れば、チベット人の農民の暮らしは、四川省から移住してきた漢族と比べても、ずっと貧しいのだろう。貧しいながらも、古いチベットの暮らしを守り続けている。

明治時代の日本人の暮らしも、こんな感じだったのではないか。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が、昔ながらの盆踊りを見て、東洋の神秘を感じたというのも。言葉は通じなくても、人々の温かさを胸で感じた。この平和がいつまで保たれることだろう。

石ころの道を果てしなく、だらだらと車で上っていく。運転席の脇に乗っていた梁さんから、この辺りは撮影禁止地区だからと言い渡された。小高い丘の上に、煉瓦色の石造りの建物が見えてくる。これが蔵王墓、歴代チベット王の霊廟である。

七世紀初頭に吐蕃を建国したソンツェン・ガンポ王と、唐から降嫁した文成公主を祀る寺が建っている。中国では公主（皇女）の降嫁をもって、チベットとの友好が始まったと喧伝されているが、当時は吐蕃の軍事力の方が唐よりまさっていたという。一方、仏教と養蚕をチベットに伝えたのは文成公主だったとされる。ただし、チベットでは後に中国仏教は退けられ、インドから後期密教が導入されることになるのだが。

薄暗い堂内に入っていく。墓自体はこの寺の地下にあるらし

い。撮影料を十五元払えば、仏像の写真も撮れるというのが、中国支配下のチベットらしい。中央に祀られているのがソンツェン・ガンポ王、その両脇に祀られているのは、文成公主とネパールから降嫁したティツゥン妃。金色（こんじき）の像に目鼻が書き込まれており、日本の仏像ほどは洗練されていない。右側には仏足と伝えられる、白地に朱の足跡が、傍らにはパンチェンラマ十世の写真が祀られている。

堂内の壁には後期密教の諸尊が、いかめしい形相（ぎょうそう）で睨（にら）んでいる。日本の密教でいう明王や護法尊である。まず目についたのは、仏像の頭頂から垂直に線が延び、もう一つの頭が生えているという点である。これは行者が頭上（ずじょう）に仏像をイメージし、そこから出た光が行者の頭頂から身体に下りてくるという瞑想

と、何かしら関連がありそうである。

お寺の脇の仏塔を時計回りで巡ることになった。仏教徒は右回りするわけだが、チベット土着のボン教徒は左回りする。チベット人の若いお坊さんは、臙脂（えんじ）の袈裟を着ているが、髪はきれいに剃り上げていない。スポーツ刈りのようで、目は愛嬌あってニコニコしている。

階段を下りていくと、蔵王墓の記念碑が建っている。その裏手には、文化大革命の時に破壊されてしまった寺院の跡がある。最大宗派ゲルク派の宗祖、ツォンカパの霊塔を祀る大寺院ガンデン寺（甘丹寺）なども、一旦は無残な廃墟（はいきょ）になり、ようやく修復されてきたわけだから、まして小さな寺院の多くは、瓦礫のまま放置されているのである。

元来た道を引き返し、昼食をとることになった。僕はかなり食欲があったが、Ｙさんはほとんど食べられなかったようだ。ホテルで小休止している間、にわか雨があった。チベットでは夏は雨期に当たるが、一時的なものであり、木々を潤おし、土埃を鎮めてくれる点では有難い。

午後三時半にツェタンのホテルロビーに集合。目指すユムブ・ラガン（雍布拉康）は、吐蕃建国の父ソンツェン・ガンポ王と唐から降嫁した文成公主が避暑で過ごした、チベット最古の宮殿とされる。名前はチベット語で「牝鹿神殿」を意味する。もちろん、元の宮殿が保存されていたわけではなく、文化大革命で破壊されたのを、一九八二年に再建したものだという。

車は途中まで舗装された道を進んでいたが、土埃のひどいでこぼこ道になった。それでも三十分ほどで到着したようだ。車は壮大な高原を眼下に望む地点にあった。なだらかな丘にはさまれた土地には、水が流れた跡があるが、まばらに草が生えるだけの荒れ地である。広大な地が手つかずのまま残されているのは、それだけここの自然が過酷だという証である。

ところで、肝心のユムブ・ラガンは、高い丘の頂に建っていた。ちょっと途方に暮れるような高さである。日射しが強いせいで、思ったほど寒くはない。ここは富士山頂みたいなものだから、真夏でも身震いするはずなのに。

急坂を上り始めた途端、息切れが始まった。建物は百メートル以上高い所にあるように見える。無理して登っていくと、今

度は心臓に痛みが走った。高山病が命取りになるというのも分かる。少し休むと、だいぶ足が楽になってきた。ようやくユムブ・ラガンの下にたどり着いた。

　蒼穹（そうきゅう）にそそり立つ宮殿を見上げる。ノアの箱舟から四角い煙突が突き出したような形。実際には数段の建物が連なる複合体なのだが。さだめし西洋人なら、大洪水の後に岩山の頂に漂着した船に見立てることだろう。

　金色の屋根の下は、煉瓦色に縁取られた白壁（しらかべ）が基調。そそり立つ塔の部分も同じデザインで、剝き出しの岩山に佇立（ちょりつ）する姿は、大草原の中に唯一の建造物を築いた王の気概を感じさせる。東洋人の僕が見ても、神に近づくために造られたバベルの塔に似て、人間に潜む神性がなせる業（わざ）である気がした。

　ようやく宮殿の入口まで登りきった。ユムブ・ラガンは三層の石造りとなっている。入った正面に祀られているのは釈迦牟尼（しゃかむに）だろうか。進んでいくと、インドから密教をもたらしたパドマサンバヴァ（蓮華生大師）、ソンツェン・ガンポ王、文成公主、ティツゥン妃らの像もある。

　再建された宮殿の内部は、金色の像が並ぶばかりで、王と王妃の暮らしを偲（しの）ばせるものはない。一階を出て脇の外階段を上り、さらに内側の梯子（はしご）を上ると、向いの岩山に連なるタルチョ、経文を記した五色（ごしき）の旗が見える。当時の二人も、こうした光景を眺めていたのか。チベット人は風が吹くたびに、たなびくタルチョが真理を弘（ひろ）めていると考えているのだ。

　しばらくは、塔からの眺めを楽しんでいた。どこを見回して

も、チベットの山には木が生えていない。文字通りの岩山だ。森林限界を越えているのと、極端に空気が乾燥しているためである。今は雨期であるから、岩肌にもまばらに草が生えているのだが。

もう一箇所、今日は巡る場所がある。ソンツェン・ガンポ王によって創建されたタントゥク（昌珠）寺である。山門をくぐると、境内（けいだい）はかなり広い。文化大革命でかなりの破壊を受け、壁画を修復している最中だった。チベット人が最も大切にしてきたものを、破壊し尽くされたのだから、人々の心の傷はまだ癒えていない。

門の中にはさらに門があり、周囲に金色の円筒状のマニ車が

延々と連なっている。歩きながら回転させるたびに、経典を読誦（どくじゅ）した御利益（ごりやく）があるというもの。回すとしばらくくるくる回っていて、振り返ってみると、回転運動が次々に伝わっていくかに見える。まあ、四国霊場八十八箇所の砂を踏めば、お遍路（へんろ）さんになって巡ったに等しい効験（こうげん）があるというのと、同じような発想である。

ちなみに、このマニ車はチベット独自のものかと思ったが、鎌倉の長谷寺（はせでら）に一切経（いっさいきょう）を収めた巨大な摩尼（マニ）車があった。こちらは全身の力を込めないと動かない。これだけ重いと、一度回転させただけでも、御利益がありそうである。

煉瓦色の石造りの建物が、真夏の光の中でまばゆく浮かび上がる。中国や日本にある木造の寺院とは、全く雰囲気が異なる

のだ。境内の壁には釈迦牟尼の一生を表す絵が、まさに描かれているところだった。パドマサンバヴァの壁画なども、極彩色で目に飛び込んでくる鮮やかさを放ち、すべて心の目で見た物を描いているようである。

チベット仏教の修行では、曼荼羅の細部まで記憶し、意識を保ちながらイメージを脳裏に再現する。覚醒夢を見るほど想像力が活性化すると、映像が現実であるかのようにありありと見える。壁画を描いている僧侶は、脳裏に浮かんだイメージを描いているのであり、写真を見ながら模写しているのとは、生々しさという点で大きな違いがあるのだ。

タントゥク寺に祀られている仏像を、いくつか紹介していこう。ポタラ宮の建設を命じたダライラマ五世、歴代の中で最も

崇拝されているダライラマの像は、黄色い僧帽をかぶり、かっと見開くような目に口ひげ、右手で印を結んでいる座像。厳めしさが独特だから、見間違えることはない。

日本の仏教では余りお目にかかれないターラ菩薩は、女性的な柔和さを保っている。観音の化身とされており、白ターラは文成公主、緑ターラはティツゥン妃であると、チベット人は考えている。白ターラについて言うと、顔や足などに七つの智慧の目がついている。

釈迦十大弟子が祀られている一方、一つの部屋に釈迦像が十体あったりする。これは釈迦が十大世界の主であると考えられているからだという。無量寿仏の別名を持つ阿弥陀如来の前では、長寿を願う祈りが捧げられている。

二階に上がると、僧侶の住居が並んでいる。大部屋の中央には、朱の生地に真珠を貼り付け、観音の姿をかたどった巨大なタンカ（仏画）がある。ダライラマ五世が母の供養のために、作らせた物だと言われる。隣の部屋には、インドから密教を伝えた行者、パドマサンバヴァの像が祀られている。ここにもパンチェンラマ十世の写真が飾られている。

　一九五九年のチベット動乱で、ダライラマ十四世はインドに亡命したが、パンチェンラマ十世は共産党支配下のチベットにとどまり続けた。しかし、一九八九年、ラジオで中国のチベット政策を批判した直後、謎の急死を遂げる。謀殺されたのではないかという噂が流れ、チベット人は死を悼みつつ、崇敬の念を深めたのである。

　また、車に乗り込み、埃っぽい道を、ツェタンのホテルまで戻っていく。午後六時半といっても、明るさは真夏の午後三時ぐらいだから、日暮れまでは時間がある。夕食は牛肉のカレーにもやし炒め、キュウリの砂糖まぶし、ひまわりの種、紅景天のジュース。チベットに来たというのに、チベット料理らしい物は、まだ口にしていない。

サムイェ寺とヤムドゥク湖

　ツェタンでの最後の夜が明けた。午前七時四十分にホテルをチェックアウト。といっても、北京時間に付き合わされるチベットでは、夜明け間もない涼しさである。今日はまず、サムイェ（桑耶）寺に向かう。中国仏教とインド仏教の優劣が論じられていたチベットで、インド仏教のうち、とりわけ後期密教が栄えるきっかけとなった論争がなされた寺院である。

　ガイドの梁さんが、観光には五、六時間かかると言っていたが、ヤルツァンポ川の船着き場にたどり着いて、余りの川幅の広さを見せつけられたときには納得した。ほとんど海峡ほどの幅である。雨期なので水量も多く、茶色く濁ってはいるが、流

れは至ってゆるやかに見える。水深が浅いために、低地いっぱいに浸水してしまい、川向こうは線のようにしか見えない。

　サムイェ寺は対岸にあるとはいえ、川上にある渡し場へは、船で斜めに横断するので、余計に時間がかかるらしい。乗ってきた車に大きな荷物は残し、平底の川船に乗り移った。増水した川は河原の林の多くを、幹の途中まで水没させている。にもかかわらず、夕立程度の雨では、乾ききった大地を潤すことはできず、山の斜面は砂漠と化して、風が吹くたびに、恐ろしい砂嵐を引き起こす。静寂が訪れると、美しい風紋を描き出すのである。

　雨が降るだけで、剥き出しの山から泥が流れ込むため、川の水はいつも濁っている。その砂が堆積（たいせき）して、中ほどに大きな中

州を作り出しているが、草木を生やすこともなく、砂の島のままでとどまっている。ひとたび洪水が起これば、植物の根に支えられることのない中州は、一気に濁流に呑まれてしまう。

川岸にいるときは、川は流れの止まった湖のように見えた。ところが、船が中ほどに達すると、膨大な泥水がすべてを押し流しているのが分かる。ただ、流れにはむらがあるため、淀みには砂が堆積し、現に僕が乗っていた船も、がくっという衝撃とともに、しばらく立ち往生（おうじょう）してしまったのだ。

時計を見ると、午前九時を回っていたが、北京時間であるため、流れる空気は早朝の冷ややかさ。日の光もまださほど強くなく、両岸に広がる山並みも、稜線（りょうせん）がくっきり浮かび上がっている。川風に当たると身震いしてくるので、船底（ふなぞこ）で身を縮め

ている人も多い。渡りきるには一時間かかると言われていたが、実際には一時間二十分ほどかかってしまった。大陸を流れる川のスケールは、とてつもないほど大きい。

ヤルツァンポ川を渡りきると、今度は青いトラックの荷台に押し込まれることになった。荷台の上に渡した手すりにつかまって、これから道なき砂の道を運ばれていくらしい。

「強制収容所にでも連れていかれるのかね」

他の日本人客が軽口を飛ばしたが、これじゃ屠殺（とさつ）されに送られる牛か何かみたいだ。いざトラックが砂山を登っていくと、揺れ方が半端じゃない。

「僕の前には道はない。僕の後ろに道は出来る」という高村光

太郎の詩を地（じ）で行っているのか。自家用車ではとても進めない悪路である。普段は真面目なガイドの梁さんも、思わず「チベッタンダンスしてる」と冗談を洩らすほどだ。それを聞いて気分も一転、他の日本人客も「チベッタンダンス」と言いながら手すりにつかまり、激しく揺さぶられるのを楽しんでいる。

サムイェ寺の境内まで、トラックは進んでいった。伽藍（がらん）の中で最も美しいのは、中央に位置する大本殿（だいほんでん）である。金色の屋根を持つ三層の造りで、一階がチベット式、二階が中国式、三階がインド式になっている。屋根に近い白い壁には、仏陀の智慧を表す二つの目が描き込まれている。ここは、ティソン・デツェン王が八世紀に創建したとされる。

境内からでは分からないのだが、小高い丘から見ると、サム

イェ寺は大本殿を中心に、円状の境内に仏殿（ぶつでん）などが配置され、チベット仏教の曼荼羅の形を成している。大本殿が宇宙にそびえる須弥山（しゅみせん）を、四方の伽藍のうち、東側には文殊（もんじゅ）菩薩、西側には弥勒（みろく）菩薩、南側には阿弥陀如来、北側には釈迦如来を祀ることで、四つの大きな大陸、四大部洲を表すなど、古代インド人の宇宙観を立体的に表現している。

ようやく、トラックは売店の前に止まった。他の日本人客も降りていく。そこには十年間ガイドをしているプロがいて、梁さんの先輩に当たる人だというので、Y夫妻や僕も一行と一緒に回っていくことにした。

大本殿の一階はチベット式で、多くの僧侶が読経している。広い堂内の奥には釈迦如来のほか、歴代のチベット王、密教を

広めたパドマサンバヴァの像などが祀られている。日本で言えば、役行者（えんのぎょうじゃ）のような存在で、大きく鋭い目で威嚇（いかく）する形相は、チベット土着の神々を調伏（ちょうぶく）した法力（ほうりき）を物語っている。また手が示す密印も、仏像を区別する際に役立つ。

堂内は必ず右回りで巡らなければいけない。左回りは仏教と敵対した土着宗教、ボン教の行者の巡り方なので。堂内の右にいるお坊さんは、先の曲がったバチで大太鼓を叩き、心臓に響くような低い音を出す。うなるような鈍い読経の声が響き渡る。

二階は中国式である。ラーメン丼（どんぶり）の縁を飾る「喜」をデザインしたマークを、壁の上に認めることができる。ここにはチベットの歴史を表す壁画が描かれている。チベット人は、観音菩薩の化身であるオス猿と羅刹女（らせつにょ）から生まれたとされている。

大本殿は上の階に行くほど小さくなる。三階はインド式である。文殊菩薩を中心に、チベット仏教の四大宗派、ニンマ派、カギュ派、サキャ派、ゲルク派の高僧像や、歓喜仏などが祀られており、天井には見事な曼荼羅が描かれている。

横にはダライラマ十四世の休憩室（きゅうけいしつ）があった。大きな椅子は長い間、主（あるじ）が座ることなく置かれている。そこにはサムイェ寺の境内を描いたタンカが掛けられていた。

一通り大本殿を拝観した。一階に戻ると、マニ車を回しながら回廊を進んでいく。壁画にはまだ、文化大革命の生々しい傷跡が残っていた。仏の目を白く塗ったり、黒い塗料をかけたり、壁の一部を叩いて剥がしてしまったり。膨大な壁画のすべてが、どこかしら破壊されている。廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の頃の日本でも、多く

の寺院が廃寺となり、仏像は溶かされ焼かれ、首を落とされ砕かれた。そうした文化破壊を、二度と繰り返してはならないのだ。

昼食をとることになった。食堂に入ったのだが、そのすさまじさといったら、線の細い日本人なら卒倒してしまいかねない。蝿（はえ）の数がものすごいのだ。数百、いや千匹はいただろう。窓と言わず、テーブルと言わず、蝿が群れを成して止まり、蝿の群衆で真っ黒なのだから。食べ物の匂いに興奮して、うごめく表面から噴き出すように、ブンブンうなりながら飛び回っている……

細かいことは気にしない僕でさえ、こんな所で物を食べるの

は御免（ごめん）こうむりたいと思ったのだが、Ｙさん夫妻がいやな顔一つしないのには驚いた。お友達になりたいと飛んでくる蝿に、おまえらの面（つら）なんぞ見たくないと言っても、言葉が通じる相手ではない。

さて、注文して出てきたチベットのカレーは、ジャガイモとヤクの肉が入っていたのだが、汁気がないし肉は筋っぽいし、はっきり言ってまずかった。蝿の絨毯（じゅうたん）を見ながらだから、食欲も失（う）せて残してしまった。バター茶に関しては、モンゴルの物よりも脂気（あぶらけ）が強くてミルクっぽさがなく、塩気もあまり感じられない。周りの客は大半がチベット人だった。

食堂を出た後、近くの村を散歩した。石造りの農家が建っていて、畑仕事をしている男女が、物珍しそうな目でこちらを見

ていた。道を進んでいくと、小川が流れている所に出た。川上の林の中では、十名近くのチベットの若者が洗濯をしていた。

Yさんが近づいていき、中国語で話しかけた。通じたのはそのうちの一人だけだった。共産党支配下のチベットでは、中国語が話せなければ、町に出てもまともな給料は得られない。これがチベット人の強い不満となり、暴動が起きる原因となるのだが、中国語の教育を強制すれば、中国化されることへの反発を引き起こすことになる。

また、ダライラマの写真を持っているだけで、公安に連行されるという現実も、仏教に最高の価値を置くチベット人には、受け容れられないことだった。ただ、この時はそうした緊張は感じられず、「おじいさんは山に柴刈りに、おばあさんは川に

洗濯に」といった、昔話を彷彿（ほうふつ）させる光景に、しみじみとした懐かしさを覚えるばかりだった。

さて、チベット人が好きな物は何か？　チベット人は非現実的なものに興味を示すわけだが。仏教に対する敬虔（けいけん）な気持ちは、厳しい風土が来世の幸せを願わせるんだろうが、もう一つはギャンブルだそうだ。一見、宗教と相容れない気がするが、中国人に国を奪われ、いい仕事もない、来世は遠しとなれば、賭け事に夢中になるのも分からないわけではない。

一方、チベット人は遊牧民族だから、牧羊犬として犬を飼ってきた。牧羊犬のほか、番犬や最近はペットとして飼うことも増えてきたという。伝統的に飼われてきたチベット犬は、いか

つい顔をした大型犬で、餌をやったらすぐ尻尾を振る日本の犬とは、随分イメージが異なる。しかも、狂犬病の予防注射などしていないから、近づかない方が身のためである。サムイェ寺の境内にも、やたらと犬が放し飼いになっているが、午後の昼下がり、真夏で日射しも厳しいので、犬たちもお昼寝タイムである。

一つ気になったのは、境内に流れる中国語の歌である。中国支配下のチベットで、ラジオをつければ中国語が流れてくるのはしかたがないが、せめて寺院の中ぐらいは控えてもらいたい。チベット文化も観光資源とされている現実を、見せつけられている気がした。

午後二時過ぎ、他の日本人客と合流して、行きと同じように

トラックに揺られ、ヤルツァンポ川の河岸にたどり着く。帰路は流れに乗って下ってきたので、渡りきるのに一時間もかからなかった。風がやや強まってきたのか、周囲の山が砂塵（さじん）でかすんでいる。

船着き場からまた車に乗り込んだ。予定の時間にかなり遅れていた。ラサ（拉薩）の方向に走っているのだが、そのまま正面に進まずに左折するのが、ヤムドゥク湖への道である。狭い道路の所々にチベット人の集落が見えるが、うねうねと続く坂道は次第に急になり、右側に巨大な渓谷が広がってきた。

幾重（いくえ）にも層をなして削られた崖の重なりには、見る者を圧倒させる威厳があった。谷間の奥には、恐らく文化大革命の時に破壊されたらしい寺院が、屋根もなく壁も砕け落ちて、表面が

雨に打たれて茶色く変色し、無残な姿をさらしていた。
　大寺院の修復は進んでいても、観光客の訪れない山あいの寺を立て直す財力は、貧しい遊牧民にはないだろう。ただ名残を示す五色のタルチョ（経文の旗）が、風にはためくばかりである。

　道幅が数メートルしかなくなった。しかも右側は絶壁である。舗装もされていないんだから、どのぐらい揺れるかは推（お）して知るべし。上からマイクロバスが下りてきたが、擦（す）れ違うのもやっとだった。しかも、こんな悪路だったら相当慎重になるだろうに、中国人の運転手は気にも留めずに、日本人の場合の倍はスピードを出している。

　運転に自信があるのだろうか。それは確かだろう。でも、不測の事態だってあるはずだ。そんな時はどうする？　そんなこと知っちゃいない。谷底に落ちたら、運が悪かっただけのこと。
　プロパンガスのタンクを積んだトラックが、横転しているのを見たことがある。中国の運転手には、命知らずの人が多いんだろう。わざわざ高速道路を造るまでもない。自動車が高速に走ればいいだけの話。スピード違反で点数稼ぎする日本の警察みたいなこと、中国の公安は関心がないんだろう。
　頭痛がひどくなってきた。とんでもない悪路だから、椅子の上でお尻がジャンプし続けている。そのたびに頭は金槌（かなづち）で叩かれるほどの痛さになった。
「あと何メートル上るんですか」

「百メートル」
梁さんの返事を聞いて、気が遠くなりそうになった。いよいよ自分も高山病に取り憑かれたのか。目指すヤムドゥク湖（羊卓雍措）は、標高四千五百メートルにある。時折、スプレー缶の酸素を吸っていたが、こんなのは焼け石に水である。次第に意識が朦朧としてきた。
「あともう少しですよ」
窓の外を見ると、家が建っている。こんな高いところにも、チベット人は住んでいるのか。上りきったところで車は止まった。ふらふらになって、峠の上に転がり出た。泥酔状態で風に当たって、目が覚めたといった感じか。
湖は谷底に緑かがった深い色で横たわっている。眠った女神

のように静まりかえっている。左方の彼方には、雪をいただいたヒマラヤの山々が見える。水面へと下る断崖に生える草はまばらで、湖岸にわずかに黄色い花の群落がある。
ああ、美しいと感嘆して目を閉じた。ところが、目を閉じてもヤムドゥク湖は見える。これはどうしたことか。酸素が薄いせいで、夢の中をさまよっているらしい。幻覚にとらわれたように、現実感がさっぱりない。
ゆっくりと目を開き、手にしていたカメラで湖面を写す。この湖の彼方には、第三の都市ギャンツェ（江孜）がある。チベット人にとって、ここは聖地であって、巡礼者は経文が書かれた五色の紙、風の馬を意味するルンタを、湖面に向かってまくのだ。

しばらく眺め入っていたかったのだが、次の瞬間、けたたましい笑い声とともに、チベット人の子供たちに囲まれてしまった。日に焼けた少年たちは、待ってましたとばかりに、大きく見開いた目できょろきょろし、こちらを珍獣か何かのように眺めている。

小学生ほどの少年ばかりで、どの子も可愛らしくて愛嬌がある。そのうちの一人にひまわりの種をあげたら、次から次と手を差し出してくる。ペンをくれ、バッチをくれ、フイルムを取り出したかったのだが、鞄（かばん）を開けたら何かなくなってしまいそうだった。Yさんが声をかけて並ばせ、子供たちと奥さんを写真に収めた。やっぱり可愛い。満面が笑顔の子供は、かつての日本にもいただろうが。

頂には経文の旗をつないだタルチョが立っていた。突然、つむじ風が起こって、経文を記した紙ルンタが、砂埃（すなぼこり）とともに巻き上げられた。風の馬が疾走していくのだ。振り返ると、乗ってきた車に異常が発生しているようだった。運転手が下にもぐっている。どうやらあの悪路でパンクしてしまったらしい。

タイヤの交換が始まると、物珍しそうに少年が群がっている。すでに午後六時半を回っていたが、北京時間だから日が沈むにはまだ時間がある。ようやく修理が終わり、出発する段となったのだが、少年たちがしがみついて、発車しようにも発車できない。奥の手はお菓子だった。梁さんが煎餅（せんべい）を一人一人に配って、食べているうちに発車！　何となく後ろめたい気持ちがしたが……。

あのデコボコ道が待っていた。タイヤが石をはじき飛ばすたびに、金槌で叩かれるように頭が痛い。車窓の外を眺めるどころではなかった。ヤムドゥク湖は秘境中の秘境であって、訪れること自体が苦行（くぎょう）なのだった。

チベットの都ラサへ

ラサまでの道は遠かった。居眠りをした後は、ひどい頭痛は治まっていた。気がつくと大通りを走っていた。ラサの街並みはすっかり中国化され、近代的なビルが建ち並んでいる。本当にここはチベットか？　中国の地方都市にしか見えない。

漢族の運転は荒っぽい。遅い車を追い越そうとして、車が四、五台も連なっている。対向車線のラインを越えて進むと、遅い方の車でも、それに負けじと速度を上げる。クラクションがけたたましく鳴り、反対から来る車と接触しそうになる。猛スピードで進む車の間を縫って、人々や自転車が平気で横切る。まさに命懸けだな。

ラサはもはやチベット人のための都ではない。近代化を押し進めること自体、中国の一部と化していくことにほかならない。チベット文化は農村を除いて、過去の遺物となりつつある。それに抵抗するように、チベット人は民族衣装をまとい、チベット仏教への信仰を貫き、ダライラマを崇拝してやまない。それがまた弾圧を生んでいく。

その日は疲れていたので、夕食の後すぐに眠ってしまった。翌朝から体調がおかしくなった。ヤムドゥク湖まで上ったのが、かなり応えていたようだ。すっかり食欲がなくなってしまった。頭痛もまだしていたし、おまけに下痢の症状まで出た。Yさんに高山病の薬をもらったら、少し良くなったような気がしたが。

今日はまず、ラサの西にあるデプン（哲蚌）寺に向かった。ここは東のガンデン（甘丹）寺、北のセラ（色拉）寺と並ぶラサ三大寺院であり、いずれもチベット仏教の最大宗派ゲルク派に属している。

ラサの郊外の岩山に、多数の伽藍が建つさまは、比叡山（ひえいざん）あたりを思い浮かべるといい。ただし、チベットの山は岩が剝き出しであるし、金色のきらびやかな屋根と白壁が、突き抜ける青空を背後に建つさまは、地味な日本の寺院とは対照的である。人民解放軍が侵攻する以前は、一万人の僧侶が修行する大寺院だったという。

途中までは車で上り、デプン寺全体が見渡せるところまで来た。大きな岩の中央に描かれているのは、ゲルク派の開祖、ツ

ォンカパである。ダライラマを法王にいただくゲルク派は、厳しい修行で知られており、他派と違って妻帯（さいたい）は認めていない。

　小川に沿った小道を行くと、数多くの巡礼者がしゃがみ込み、マニ車を回していた。山門の入口で、まずデプン寺の写真集を買った。この大寺院は多くの壁画やタンカが有名で、ダライラマ五世もポタラ宮完成までは、ここに住まっていたという。

　デプン寺でとりわけ目を引くのは、千手観世音菩薩である。右側にはダライラマ二世から五世までの本座（ほんざ）が設けられている。チベット仏教では、阿弥陀如来を過去の、釈迦如来を現在の、弥勒菩薩を未来の仏というふうに位置づけている。仏像の印なども、中国仏教とは異なっている。

　巡礼者は溶けたバターを入れた薬罐（やかん）を持っており、仏前にある灯明（とうみょう）に注いでいく。乳臭いような独特の匂いが、薄暗い堂内に漂っている。中国人の観光客もいるが、大半はチベット人の巡礼者である。

　チベット人の様子を見ると、日本で寺参りしている人々と大して変わらない。超絶した世界を求めているというより、自らや家族の幸せを祈る、現実的な祈りの方が普通のように見えたからだ。とはいっても、密教僧でなければ、日本では五体投地（ごたいとうち）などしないだろうが。

　デプン寺は境内からラサ市街が見下ろせる。パノラマのように、建物の一つ一つまで見渡せるのである。すぐ下の道では、鈴をつけられたヤクが杭（くい）につながれて、黒い体を揺するたびにチャラチャラという音が響いてくる。

のどかな気分に浸っていたのだが、ふと横の壁に目をやると、壁には漢字で文化大革命のスローガンが書かれている。実はここデプン寺でも、裏手に回れば、打ち砕かれた僧院の廃墟が、まだ痛々しい姿をさらしているのだ。

昼食はまたもや中華料理だったが、気分が悪くてほとんど箸(はし)をつけられなかった。いったんホテルに戻り、ベットで仮眠することにした。午後三時にロビーに集結した。次に向かうのはノルブリンカ（羅布林卡）である。

ここはダライラマの夏の離宮(りきゅう)だった所。冬の間はポタラ宮で政務を執っていたという。ノルブリンカとはチベット語で「宝の庭」を意味する。ダライラマ十四世の居室や、近代的な浴室、

トイレも残されている。

壁に掛かった時計は、九時を指したまま止まっている。一九五九年三月十八日午後九時、中国軍に拉致されるのを避け、ダライラマ十四世はノルブリンカを脱出、高僧らとともに極秘でインドに亡命した。不思議なことに、十四世が去るとともに時計が止まってしまったというのだ。

ワーク作曲の「大きな古時計」みたいな話だが、心理学者のユングによれば、無意識の作用によって偶然の一致が起こることはあるという。ユングはこれを「共時性」と名づけて解明しようとした。ダライラマ十四世のインド脱出とともに、チベットが国としての命を絶たれたということを、象徴しているのではないか。まあ、これはダライラマを観世音菩薩の化身とし、

死後も転生（てんしょう）すると信じているチベット人が、ダライラマの有難さを吹聴（ふいちょう）するために言い出したことかもしれないが。

ノルブリンカには、ダライラマ十三世が作らせた動物園も残っている。猿と熊ぐらいしかいないということで、今回は見物することはなかったが。公園内を歩いていくと、「お金をくれ」とせがむ子供たちが集まってくる。「没有（メイヨウ）（＝ない）」と言って避けていたが、楽器を弾く女はYさんにつきまとい、お金がもらえないと分かると、背後から唾（つば）をはきかけた。

チベット人にとっては、日本人も中国人（漢族）も見分けがつかない。しかも、中国語を話せば、中国人だと思われてもしかたがない。

奈良の東大寺に匹敵する寺院が、ラサのジョカン寺で、正式名はトゥルナン寺（中国名・大昭寺）である。ジョカン寺を一周する形で、商店街のバルコル（中国名・八角街）が広がっている。その日、最後に訪れた場所である。

大本堂を表す名前から、一般にジョカン寺と呼ばれている。吹き抜けの高い天井と太い柱を持ち、金色の甍（いらか）に覆われた建物は、三層から成っている。一階では僧侶がチベット語で読経をしている。何であんな低い声が出るのか、と思えるほど腹に響くうなりである。

かつてのチベット人は、ジョカン寺とバルコル、ポタラ宮を中心に世界が回っていると考えていた。伝説によると、ラサの地が湖底にあった頃、ソンツェン・ガンポ王が「ここを土地に

変えるなら、この指輪を捧げる」と祈って投じたところ、湖の中から白い塔が現れて干上がったという。その塔はジョカン寺の大本堂の中に残されており、穴の開いた石に耳を傾けると、心が清浄な者のみが、かつての湖の水音を聞くことができるとされる。

ジョカン寺の本尊は、ソンツェン・ガンポ王の妃（きさき）で唐から降嫁した文成公主がもたらしたものとされる。幼い頃の釈迦牟尼の姿を写したもので、あどけなさが残りながらも、澄んだ目をした金像（こんぞう）は、宝冠や首飾りに宝石がちりばめられている。

そもそも、チベットに仏教をもたらしたのは、インドではなく唐だったのである。現在のチベット仏教は、インド伝来の後期密教だけれども。中国全土を破壊し尽くした文化大革命のと

きも、この釈迦牟尼像の美しさに、中国兵は手を出せなかったとされる。

数多くの仏像が並ぶ大本堂の上に出ると、金色の甍越しにバルコルと、彼方の丘にそびえるポタラ宮を望むことができる。そこに香港（ホンコン）から来た青年がいたので、英語で話しかけてみた。もう二週間も滞在しているので、頭痛などはしないということだった。

梁さんが車の中で洩らしていたことについて、Yさんが口を切った。梁さんは日給が五十元で、今回のガイドでもらえるのが三百元だが、チベットでの生活費には月千元はかかるらしい。しかも、四川省にいる奥さんに、仕送りをしているのだ。漢族のガイドも決して楽ではないのである。そこで、クンガ空港で

見送ってもらうときに、少しカンパしてあげようということになった。
　大本堂の下に出ると、ジョカン寺の扉（とびら）はすでに閉まっていた。その前で多くのチベット人が、五体投地で祈りを捧げていた。人々の熱烈な祈りを間近に見られるのは、ここととポタラ宮の前ぐらいだろうか。
　バルコル、いわゆる八角街を見て回ることになった。梁さんの話によると、ここは物乞（ものご）いと泥棒が多いので、周囲に目を光らせておく必要があるとのこと。露店では仏具のほか、食べ物、おもちゃ、服、帽子など、ありとあらゆる物が売られている。買い物する時は、値段は交渉次第。中国語でしゃべるより、英

語でしゃべった方が、チベット人からの受けはいい。
　この周辺は経済的に恵まれたチベット人が暮らしているので、家々の窓は色とりどりの花が飾られている。時刻は夕方というのに、日射しがかなり強いので、頭がくらくらしてきた。
　夕食でようやく、チベット料理のレストランに連れていってもらった。きれいに盛りつけられていた肉料理、チベット式の蒸し餃子（ギョーザ）モモ、麦焦（むぎこ）がしのツァンパや、バター茶ももちろんあったが、高山病の影響だろうか、むかむかして、一口味見するのがやっとだった。まともに飲み干せたのは、マンゴージュースぐらい。
　疲れ果てていたので、午後八時にホテルに戻ると、ベッドにすぐに倒れ込んだ。そのまま、起きているのか寝ているのか分

からず、高熱にうなされているときのように、意味不明の夢を見続けていた。

ダライラマのポタラ宮

チベット人が崇拝するダライラマは、観世音菩薩の化身だと信じられてきた。「ダライラマ」とは、モンゴル語の「ダライ（大海）」とチベット語の「ラマ（上人（しょうにん））」が結びついた名称。清王朝が成立した十七世紀、チベットを制圧したモンゴル王のグシ・ハーンが、チベット仏教ゲルク派の信者で、チベット全土をダライラマ五世に献上（けんじょう）したことから、ダライラマによる祭政一致の政権が成立した。

　日本には補陀落渡海（ふだらくとかい）と言って、僧侶を小舟に押し込めて、観音の浄土「補陀落」に送る風習があったが、この「補陀落」と「ポタラ」は語源が同じである。また、日光の東照宮は神仏分

離令以前、東照宮と輪王寺（りんのうじ）、二荒山（ふたらさん）神社が一体であり、神仏習合の日光山だった。男体山（なんたいさん）の別称である二荒山だが、これも観音の浄土「補陀落」と語源が同じで、「二荒」を音読みして「にこう」となり、それに「日光」という漢字が当てられるようになったと言われる。ポタラ宮という名称も、観世音菩薩の宮殿という意味である。

ラサの「マルポリの丘」にそびえ立つポタラ宮は、チベットの象徴であり、チベット動乱でダライラマ十四世がインドに逃れた後も、チベット人の崇拝の対象である。今回の旅の最大の山場は、このポタラ宮を訪れることである。

ところが、約束の時間になってもホテルに車が来ない。しばらくして現れた梁さんの話では、車は故障してしまったということだ。タクシーで回らなければならなくなったらしい。やはり、一昨日の強行軍が応（こた）えてしまったのか。

朝食はお粥を食べて、マルポリの丘の途中までは車で上がってもらった。それから先の階段は、一段上るたびに息が切れる。体が異常に重い。酸素が薄いために、にわか老人になった感覚である。

さて、ポタラ宮と言えば、臙脂と白の二色の壁が、青空を背景に浮かび上がって見えるが、紅宮と白宮から成っているのである。儀式を執（と）り行った紅宮と、政務を行った白宮。実は、ポタラ宮の大部分は、紅宮によって占められているのである。

ダライラマ十四世がインドに逃れたのに、チベット人はポタ

ラ宮に向かって祈りを捧げている。主なき宮殿に祈って何になると、日本人なら思うかもしれないが、主がいなくなったわけではないのだ。

実は、ポタラ宮の大部分を占める宗教施設の中心には、歴代ダライラマの霊塔があり、中には遺体が納められている。霊廟に対して崇敬の念を示しているのである。

歴代ダライラマの中で、最も偉大とされているのが、チベット人による祭政一致の政権を作り上げた五世である。紅宮の奥深くの暗がりに、ダライラマ五世の霊塔はある。チベット人は死ぬと、鳥葬といって遺体を猛禽（もうきん）に布施（ふせ）として捧げるものだが、偉大なラマは特別扱いなのである。

一番上の部分に遺体が、中央に経典が収められ、下には草が

敷き詰められている。高さは十二・六メートル、黄金を三・七トンも使っている。これを見て思うことは、ダライラマは僧侶であるとともに、国王であるということだ。

西洋で言えば、ローマ法王のような存在である。欧米人はダライラマを理想化して語るが、それは英明な十四世の印象が浸透しているからで、かつては封建的な社会の頂点に君臨していたのである。日本人が抱く僧侶のイメージや、簡素な美を持つ日本の寺院とは、対極の位置にある。紫禁城（しきんじょう）に君臨した皇帝の方に近い。

チベットで身なりがきれいなのは僧侶である。一般の民衆は疲弊しながら、盲目的な信仰に縛られていたのだろうか。文化

大革命の頃の中国人（漢族）からすれば、封建的な意識を打ち砕くには、チベット仏教の寺院を破壊するのが手っ取り早い、と考えたのではないか。

ただし、これは一方的な見方である。仏教を文化の頂点にいただくチベット人を、共産主義に改宗させるために、仏教が目の敵にされたのである。清朝の版図だったチベットを、中国から独立させないように、ダライラマを活仏とするチベット仏教は弾圧されたのである。

また、元朝と清朝の征服王朝においては、支配層のモンゴル人や満州人が信仰していたのがチベット仏教であり、少数民族の心をつなぐ絆だった。被支配層だった漢族にとっては、良いイメージが持てるはずもなかった。

チベット仏教そのものは、インドで滅んだ仏教の到達点を伝えるもので、文化大革命でどれだけ多くの文物が失われたか、惜しまれるばかりだが、ポタラ宮内部を彩る黄金や宝石、綾錦などを見ると、奴隷状態のチベットの民衆を、中国軍が解放したという主張も、全くの妄言だとは思えない。はげ山と草地ばかりの大地から、豪華絢爛たる富を生み出したのが民衆からの搾取でなければ、魔術か幻影なのだろうか。

実は、富を生み出したのも、チベット仏教だったという。中国本土の王朝から寄進という形で財宝が集められた。世俗的には皇帝の支配下にありながら、信仰という形では皇帝や周辺の王族の心をつかみ、紫禁城と見紛うばかりの宮殿を荒れ地に出現させたのである。

紅宮の中心は、歴代ダライラマの霊塔であり、周りにはチベット仏教の寺院に共通する尊像が並ぶ。土着の神を調伏して仏教を広めたインドの行者、パドマサンバヴァの金像の傍らには、妻だった女性の尊像が並ぶ。セックス・ヨーガによって、悟りに達することを可能とするチベット仏教は、女犯（にょぼん）という戒律（かいりつ）を犯す矛盾を、常に内包していたのである。

インドやネパールから送られた三千体に及ぶ仏像の中には、チベットを統一したソンツェン・ガンポ王や文成公主、ティツゥン妃らの像もある。伝説によれば、最初にポタラ宮を造営したのはソンツェン・ガンポ王であり、火事で焼失した遺構に、ダライラマ五世が再建したのだという。

ダライラマの霊塔とともに、目を見張ったのが立体曼荼羅で

ある。円形にかたどられた内部に、幾層にも甍を重ねた黄金の宮殿が、巨大なデコレーション・ケーキのようにそびえている。最後の仏教経典であり、ヨーガの修行のほか、理想郷の記述や、予言、天文学、暦法なども含む『時輪タントラ』に基づいた世界観を、三次元の形で表現したものである。

紅宮に比べれば、白宮には目を奪われるものはない。ダライラマが政務をとった部屋や会議室が公開されている。そもそも、ポタラ宮で一般人が通れるコースは、ごく一部に過ぎず、巨大な宮殿には無数の部屋が存在する。暗いトンネルを抜けたところで、ポタラ宮の外に出られる。夢と幻影の世界から、一気に現実に戻された感覚である。

余談だが、ポタラ宮名物はもう一つあった。それは空中に張

り出すように設置されたトイレである。昔の中距離電車のトイレは線路が見えて、停車中の排便はためらわれたものだが、こちらは便器の下が抜けていて、はるか下方まで何もない。高所恐怖症の人間は入るべからず。目が回って吐いてしまった人もいる。体内から排出された液体が、滝のように空中を落下していくさまを見て、僕も気が遠くなってしまった。

街中に出ると、押し売りと物乞いが寄ってきた。執拗に数メートルも付いてくる。布施を求める坊さんも強引（ごういん）で、こちらの肩を叩いて耳もとにささやきかけてくる。ツェタンのチベット人は素朴で好感が持てたが、ラサの人々は世間擦れしているのかもしれない。

さらば、チベット！

昼食のあと、タクシーでホテルに送ってもらった。午後は自由行動ということになった。梁さんはホテルでゆっくり休んでから、近場を散策すればいいと言うのだが、僕にはぜひ訪れたいところがあった。

ラサ三大寺のうち、まだデプン寺しか回っていない。ツォンカパの霊塔があるガンデン寺は、ラサの東四七キロの高地にあるから、無理なのは分かっている。すぐ北にあるセラ寺（色拉寺）なら、自分でも回れそうな気がした。『西藏（チベット）旅行記』の河口慧海（かわぐちえかい）が滞在した寺であり、かつては慧海と会ったことがあるチベット僧もいたという。

とにかく時間がないので、タクシーを拾った。英語で話したが、全く通じないので「請去色拉寺（セラ寺へ行ってくれ）」と中国語でメモを書いて渡した。ひたすら北方面に走ると、岩山の見えるかなり手前に入口が見えてきた。バス停の所で下ろしてもらった。

セラ寺は十五世紀に建てられたゲルク派の大寺院。チベットで見かける大半の寺院は、ダライラマによる祭政一致の政府を支えてきたゲルク派である。顕教（けんぎょう）の学修を義務づけており、密教の修行は一部の僧侶にしか許されていない。タントラ仏教の女神と交接した仏の姿は、仏画や壁画、瞑想の世界の存在でしかない。

ここもデプン寺と同じように、郊外の山肌にしがみつく形で伽藍が建ち並んでいる。灰色がかった岩肌を背景に、金色の甍と白壁が紺碧の空に映えて美しい。入口の前には小さな商店が建ち並んでいる。右方で入場券を売っている。片言の中国語で話すと、お坊さんが「他是日本人（ターシーリーベンレン）（あの人は日本人だよ）」と話している。日本語が分かる人が出てきた。二五元かかった。中国人が半日働いてもらう金額である。

かつてチベット人は、この寺を「荒くれ坊主のセラ寺」と呼んでいた。京都で例えるなら、比叡山のような存在で、多くの僧兵も抱えていたという。少し上った所に大きなお堂が見えてきた。赤く太い柱がしっかり建物全体を支えている。延暦寺の根本中堂（こんぽんちゅうどう）を思わせる仏殿である。

この寺は余り観光化されていないようで、仏前に英語や中国語の説明もされていない。立て札にチベット語しか書いていなかったりする。右方の岩山に登ると、ツォンカパや護法尊の絵が描かれていた。そこからの眺めが素晴らしい。

彼方のマルポリの丘には、写真で目にするのとは反対からのポタラ宮がそびえている。下方にはラサの北方の街並みが、パノラマのように広がっている。ラサを一望したかったら、セラ寺に来ればいいわけか。どこからか学僧の読経が、うなるようにはち切れんばかりの声で聞こえてくる。荒くれ坊主の山にふさわしい……。

そこを下りてうろうろしていると、上の方から「あっちに行って見ろ」と中国語で言っているらしく、盛んに指さしている。

その方向に歩いていくと、大きな仏殿の裏側に出た。お坊さんに合図されるままに中へ入る。

中央はツォンカパの像、左が釈迦牟尼、右は阿弥陀如来だろうか。三体の金色の仏像が鎮座（ちんざ）まします。英語で日本人だということを伝えると、若いお坊さんが、中央のツォンカパの像の喉に棒を当て、一方の端を僕の額に当ててくれる。

どうやら御利益のある祈禱（きとう）をしてくださるらしい。僕も合掌（がっしょう）すると、お坊さんが陀羅尼（だらに）を唱（とな）え始める。ヒゲの生えた精悍（せいかん）な人で、頭は坊主頭と言うよりスポーツ刈りである。チベット人は日本人のように神経質ではないから、カミソリできれいに剃髪するということはない。だが、日本の僧侶のように髪を伸ばしてはいない。

自分一人で歩いているので、迷路にはまっているようである。どこに進んでいるのかも分からない。たまに服装が日本人らしい人を見かけたが、話しているのは韓国語である。日本人も歩いているのだろうか。中央の参道を下りて右手のお堂に入ると、年配の僧が巨大な墨の木版画で、チベット語の経典や曼荼羅を刷っていた。

その時、急にお腹が痛くなり出した。僕はいやな予感にとらわれた。中国の公衆トイレは、個室にドアがなかったり、水洗なのに時間が来なければ水が流れず、汚物を他人の目にさらさなければならなかったり、水が流れる場合でも、トイレットペーパーを流してしまうと、たちまちつまってあふれ出したりし

たからだ。

それでも、これはホテルまで我慢できそうにない。路地を探し回っても見つからない。裏手に回ると、文化大革命の時に破壊された僧院の跡があった。どこを回ってもチベット語ばかりで、歩いているのもチベット人だけ。どこがどこやら分からない。

ふらふらになって見上げたとき、「あった！」と思ったが、同時に途方に暮れた。屋外の階段を上った先に、細長い穴が二つあいている。ドアどころか、囲い自体が存在しないのだ！すぐ脇には僧院の窓があって、お坊さんに見られてしまうではないか。しかし、恥ずかしいなどと言っている場合ではなかった。助かったと思った……

もう扉を閉ざしているお堂も多くなった。セラ寺の門を出ると、チベット人のおばさんが「ラサ！　ラサ！」と叫んでいる。「藏医院行」のバスのようだ。僕が「多少銭(ドゥオシャオチエン)（いくら）？」と中国語で尋ねると、指を二本立てた。「二元」らしい。「我明白了(ウォーミンパイラ)（分かりました）」と答えた。

バスの中はお世辞にもきれいとは言えなかった。蝿が飛び回っている。乗っているのは大半がチベット人で、欧米人が少し居合わせた。停留所に人を見つけると、車掌のおばさんが「ラサ！　ラサ！」と叫ぶ。扉の紐(ひも)を引っ張ると、また一人か二人乗ってくる。僕は地図と照らし合わせながら、今どこを走っているか確認した。

終点の「藏医院前」に到着した。ちょうどバルコル（八角街）の一番端に来たわけだ。ジョカン寺（大昭寺）に向かって進み、通りで売っている食べ物や仏具を眺めていた。両側には花を飾ったチベット式の住宅が並んでいる。

一人で歩き回るのは、今日が最初で最後だが、緊張しながらも楽しかった。元々屋台などを見て回るのは好きだから。ちょっといかがわしさはあるが、何が並んでいるか分からない宝探しの要素がある。この風景を記憶にとどめておこうと思った。

地図で確かめながら、何とか宿泊先のホテルにたどり着いた。二十分ほど休んでから、タクシーでYさん夫妻とともに、ポタラ宮前に行くと、梁さんが待っていてくれた。ラサに到着した日に食事したレストランだ。梁さんと食事するのも、これが最

後になるだろう。
「何かいいビデオはないかな」
僕が尋ねると、『神奇的西藏』という作品を紹介してくれた。中国語なのだが、英語の字幕スーパーがついているので、意味は理解できそうだった。ただし、形式がビデオＣＤだった。何それって言われそうだが、要するに、ＤＶＤが普及する前の録画形式で、コンピューターなら再生できるとのことだった。Ｙさんも思い出に買うことにした。

午前五時半に起床した。六時四十分、ホテルのフロントを出た。外はまだ暗い。Ｙさん夫妻と僕は、口数少ないまま、マイクロバスに乗り込んだ。夜明け前のラサを出発した。ポタラ宮

の前を通過したが、街灯がまだともっており、ダライラマの宮殿は輪郭しか見えない。梁さんはいろいろ話しかけてくれたのだが、僕は胸がいっぱいであまり話せなかった。
次第に明るくなって、闇の中からチベットの剥き出しの岩山が、車窓に浮かび上がってきた。空は曇っている。これが見納めになるのか。車の通行がまだ少ないから、行きと比べてもスピードは速い。クンガ空港までは、一時間二十分かかった。チェックインを済ませた後、梁さんが朝食のお粥を持ってきてくれた。
Ｙさんと僕は、心ばかりのお礼を梁さんに渡した。少しでも感謝の気持ちを表したかったからだ。
「奥さんとおいしい物でも食べて」とＹさんが言うと、梁さん

は「恥ずかしい。私は上手に説明できなかったのに」と答えた。
「奥さんにおみやげでも買って」と僕が言い添えた。
いよいよ出発である。
「お元気で」と言って手を握ると、梁さんの目が赤くなり、うるんでいた。手を振って別れる。搭乗口に向かう途中で、Yさんが話しかけてきた。
「きっと、僕たちがいい人だったからですよ。いやな日本人客も多いだろうから」

ラサから西安へ

四川省の成都行きの飛行機に乗り込んだ。その中でも機内食が出た。パンと野菜炒めの簡単な物だったが、何と食べられていい、しまった。ラサのレストランで並んだごちそうには、ほとんど手をつけられなかったのに。
窓側の席に座った中国人の女性が、窓を閉めてしまったために、行きの時のように眼下の雪山を眺めることはできなかった。やむを得ず、クラシック音楽を聴いて気を紛らわしていた。チベットに別れを告げたが、旅が終わってしまったわけではない。
成都の空港に着陸すると、日本を出た最初の夜に、ホテルに連れていってくれた中国人のおじさんの顔が見えた。英語が上

手な運転手だった。
「チベットはどうだった？」と英語で訊かれた。
「頭が痛くて大変だった。でも、面白かったよ」と答えると笑っていた。西安行きの切符を渡してくれた。
　成都から西安行きの飛行機に乗り継いだ。迎えに来てくれたのは、殷さんという中国人の女性だった。かなり慣れているらしく、信頼はできるのだが、梁さんのような人間味は抑えて、ガイドの仕事に徹しているという感じだった。
　新しくできた空港は、西安市内からかなり遠い。その車中で殷さんは、明日の西安観光について提案した。自分の商売になるわけだから、その辺はしっかりしている。車代にガイド代で

一人当たり三百元、それに入場料で百元ちょっとかかるということだった。
　西安市内に入る。南大門に連なる城壁は、長さ十二キロにも及ぶという。明代に建てられたもので、堅固な城郭都市だったことが分かる。車の走行はのろのろだった。週末で道路は大渋滞している。博物館には回れそうにないということで、西安賓館という一流ホテルに案内された。ここには竹下元首相や村山元首相も泊まったらしい。
　夜はＹさん夫妻と夕食をとりに出た。餃子やラーメンなどを食べたのだが、中国に来て初めておいしいものを口にした気がした。餃子は西安の名物で、とりわけ棒状の鉄鍋餃子は、水餃子が一般的な中国にあって、焼き餃子のおいしさを味わえる逸

品(ぴん)である。
　チベットの中華料理は四川料理で、辛くてしょっぱいものだった。やはり、古都の料理は味付けも洗練されていると思った。西安は唐の都長安があったところである。ホテルで売られている磁器も、デザインばかりでなく、光に透かしても、爪の先で弾くと出る乾いた響きにしても申し分がない。買いたいところだったが、思いの外出費してしまっていて、おみやげを買う余裕がない。
　部屋に戻った後、大きな風呂にゆったりと浸かった。濃い空気を吸うのは快(こころよ)い。湯から上がって服に着替え、ベットの上に横になると、すうっといい気持ちになった。気がつくと朝の六時になっていた。

　朝食を食べてホテルをチェックアウトした。最初に殿さんが案内してくれたのは、大慈恩寺境内にある大雁塔(だいがんとう)である。これは唐代に建てられた七層の四角い段状の塔で、高さは六四メートルもある。玄奘三蔵(げんじょうさんぞう)が天竺(てんじく)から持ち帰った仏像や経典を収めるために、皇帝の高宗に建立(こんりゅう)を願い出たとされる。その右に建つ鐘楼(しょうろう)や、左に建つ鼓楼(ころう)は、明の時代に建てられたものである。
　そんな昔に、よくもこれほど高い塔を建てられたものだと思った。しかも煉瓦造りだというから、日本の五重塔のような美しさはないけれども、存在感の大きさではるかにまさる。ピサの斜塔と違って傾いてはおらず、長い歳月倒れずに建ってい

たのが奇蹟（きせき）のようだ。科挙（かきょ）に受かった者は、それを祝して登ったらしい。慈覚大師円仁（じかくだいしえんにん）も、天台宗や密教を学びに渡唐した際に登ったという。

大雁塔には名の由来がある。当時、小乗仏教の僧侶は肉食（にくじき）をしていた。ちょうどその日は精進（しょうじん）で肉が食べられなかった。そこで空に向かって仏に、どうか私たちのことを忘れないで下さいと祈ったところ、飛んでいた雁の一羽が落ちてきて死んだ。菩薩の化身に違いないとして、雁を埋葬した地に建てられた仏塔を、大雁塔と呼ぶようになったという。

次に向かったのは華清池である。白居易（はくきょい）(白楽天)の『長恨歌（ちょうごんか）』で「眸（ひとみ）を迴（めぐ）らして一笑すれば百媚（ひゃくび）生じ、六宮（りくきゅう）の粉黛顔色（ふんたいがんしょく）無

し」とたたえられた楊貴妃（ようきひ）が、皇帝の寵愛（ちょうあい）を受けるときに湯浴（ゆあ）みした所である。

「春寒くして浴を賜（たま）ふ華清の池　温泉水らかにして凝脂（ぎょうし）を洗ふ」とあるから、モーパッサンの「脂肪の塊（かたまり）」顔負けのふくよかさだったらしい。

漢皇（かんこう）とあるのは、唐の玄宗（げんそう）皇帝がモデルで、楊貴妃への寵愛が「安史の乱」を引き起こし、その際に殺された楊貴妃への思いを、白居易が綴（つづ）った叙事詩である。ここには今でも温泉が湧き出ているが、玄宗と楊貴妃が臣下に拝謁（はいえつ）を許した飛霞殿は、再建されたばかりなのか真新しい。

玄宗や楊貴妃、臣下の使用した浴槽があるが、これらは発掘された物である。楊貴妃の像も見えるのだが、色白の姿で現代

人が好みそうなスタイルである。要するに、太りすぎず痩せすぎず、すらりと腰がくびれている。「脂肪の塊」では当世の男を惑わせられないからだろう。

最後に向かったのは始皇帝陵である。推定される総面積は、大仙陵古墳（伝仁徳天皇陵）を上回る。周辺施設を含めれば世界一の規模である。坂道を上っていくと、ピラミッドのような形をした緑の山が見えたが、これは始皇帝陵の一部に過ぎない。

司馬遷の『史記』によれば、始皇帝陵には水銀の池があったとされる。古代中国人は水銀を不老不死の霊薬と考えていたから、始皇帝は死後も地下の宮殿で永遠の命を保とうと考えてい

たのだろう。始皇帝陵の中枢は発掘されておらず、依然として謎のままである。しかし、『史記』に描かれていた記述が真実らしいことは、偶然に発掘された兵馬俑の内部を見れば納得できる。

始皇帝の在位はわずか十二年間だったが、秦王としての在位期間も含めれば三十七年間に及ぶ。秦王として即位してほぼ同時に造営が始まっており、一生をかけての大事業だったことが分かる。造営に関わった職人、商人は口封じのために、三千人いた后のうち、子を産まなかった女性は、皇帝の死後に子を産む不祥事を防ぐために、すべて生きたまま埋葬された。

秦はわずか二代で、農民の反乱によって滅亡した。始皇帝が崩御してわずか三年後のことだった。万里の長城の修築や道路

の建設、運河の開削（かいさく）、墳墓造営などの強制労働、焚書坑儒（ふんしょこうじゅ）で知られる言論弾圧と恐怖政治が、大きな反感を招いたのである。農民の放った火で皇帝の宮殿阿房宮は三ヶ月も燃え続けたという。

　歴史が伝えているのは、そんなところだが、僕の旅の続きを記すことにしよう。到着して殿さんがまず案内したのは、始皇帝陵のうち、発掘された兵馬俑の第一発見者、楊志発さんの所だった。元は農民だったのだが、世紀の発見をしてからは功労者として、観光客に話をしたり、サインをしたりして悠々自適（ゆうゆうじてき）の暮らしをしているらしい。

「記念写真を撮りましょう」

　言われるままに楊さんの後ろに立ち、撮ってもらったのだが、

撮影料を求められたので、「要らない」と答えた。まあ、普通の観光客なら買うんだろうが。兵馬俑の出土品は、何度か日本でも展覧会が開かれている。東京で実物を見たことがあったが、それはごく一部に過ぎなかった。ここ兵馬俑博物館では、発掘されたままの姿で保存されており、二百メートルはある巨大なアーチ型の屋根の下に、兵士や戦車の実物大の埴輪（はにわ）がぎっしり並んでいるわけだから、総数は気が遠くなるほどだろう。

　しかも、発掘はまだ進行中で、始皇帝陵の中心まで続いている可能性がある。始皇帝の権力がどれほどであったか、現地で兵馬俑を見なければ実感できないだろうから、古代中国の偉大さを知りたい人は、ぜひ始皇帝陵を訪ねてみるといい。

すべての見学が終わって、車中でYさん夫妻と、今回の旅での出来事について語り合った。忘れられない場面が多かったが、これほど体力的にきつい旅はなかったというのが、共通した意見だった。そのため、中国本土に下りた途端、三人ともすっかり体調を取り戻していた。しかも、当初の予定には入っていなかった古都西安も、見て回れたのは幸運だった。一週間余りの間ではあったが、一回の旅の思い出には入りきらないものを体験していた。

ついに、車は西安の空港に到着した。すべてはここから始まったのだった。殷さんには礼を言い、Yさん夫妻とは連絡先を教え合って、撮った写真を送ることを約束した。二人は関西国際空港行きで帰国するとのこと。僕は羽田行きの飛行機に乗り

込んだ。来た時とは異なり、偏西風に乗って一時間ほど速く飛んでいける。

中国時間午後三時に離陸した機体は、すでに伊豆半島上空を飛んでいた。窓の外には闇に沈みつつある富士山が見える。日本に帰ってきたと実感したが、夢のような体験が終わってしまったのを、どうしても認めたくない自分があった。

チベット入国者の先駆け

チベットに最初に入国したのは、黄檗宗（おうばくしゅう）の僧侶だった河口慧海である。漢訳の経典と異なり、チベット語訳は梵語を直訳した場合が多い。また日本に渡来していない経典もあるのを知って、単独でインドから密入国した。清国の僧に化けてラサ入りした河口は、セラ寺に滞在するが、日本人であることがばれそうになり、危機一髪のところでかろうじて出国をする。その冒険物語が『チベット旅行記』である。この種の書物の中では、第一級の資料的価値があり、読み物としても最も面白い。河口は名医扱いされて、ダライラマ十三世にも拝謁したというが、その真偽のほどは定かではない。多分に脚色されている部分も

ありそうだ。この書物の魅力の一つは、河口その人自身である。明治期の日本人の精神力は、かくまでも強靭であったかと思われるほど、河口は不屈の魂を持った禅僧だった。

　日本のチベット研究に大きく寄与したもう一人は、浄土真宗の本願寺から派遣された多田等観（ただとうかん）である。チベットに十年間滞在し、膨大な文献を日本に招来した。その割には一般向けの書物は少なく、『チベット滞在記』にしても、口述筆記されたものが捨て置かれ、死後に出版されたに過ぎない。そのため記憶に残ったことを、思いつくままに記した印象がある。

　同じく本願寺から派遣された者に青木文教（あおきぶんきょう）がいる。学会でなかなか認められなかった点では多田と共通しているが、『秘密国チベット』は「入蔵記」「チベット事情」「出蔵記」の三

部に分かれ、そのうちの「チベット事情」では、その国情を貴重な写真とともに、体系的に記している点に注目すべきである。

最後に挙げるのは、第二次大戦中に密偵として内蒙古から青海省、チベット入りをした西川一三（にしかわかずみ）である。蒙古のラマ僧に扮装した西川は、大東亜共栄圏という国策に基づいて、中国における少数民族と結んで、漢民族を包囲することを考えていたようだ。戦中の大陸の雰囲気がうかがえるとともに、ともに旅をした蒙古人への友情あふれる思いが、詩的で感性豊かな言葉で綴られている。『秘境西域八年の潜行』は、河口の『チベット旅行記』とともに、面白さではチベットを描いた作品として双璧をなすと思われる。

河口慧海の『チベット旅行記』について

河口慧海は黄檗宗の禅僧だったが、漢訳の仏典に疑問を抱き、サンスクリット語の原典、および逐語訳であるチベット語の経典を得るために、インドからネパール経由で、鎖国政策をとっていたチベットに密入国した。

チベットへは、間道を抜けて潜入を試みたが、川に流されそうになったり、吹雪（ふぶき）の山中で行き悩んだり、盗賊に荷物を奪われたり、女性に強引に迫られたりと、冒険小説に勝（まさ）るほどの苦難を乗り越え、マナサワル湖経由でラサに入った。

ラサのセラ寺で修行を始めたが、病人を多く助けたことで、セライ・アムチー（セラの医者）という評判が立ち、ダライラ

マ十三世に拝謁する機会まで得た。その後、前大蔵大臣の邸宅に寄居して、仏典の研究に勤しんだ。

冒険談はいったん中断し、チベットの文化や風俗についての記述が続くが、辛辣な批評もはばからない。チベット密教の経典は偽経で、悪魔が仏教を滅ぼすために作ったものだとも述べている。たしかに、仏陀がセックスしたり、動物の肉どころか人肉まで食べろとか、糞便や精液、経血を御供えしろとか書いてあるんだから、偽経だという誹りは的外れではない。

ダライラマ政権下のチベットで、刑罰がいかに残酷だったか、神がかりの祭政一致をやっていたか、搾取から逃れるために出家した者が多く、寺院の中で博奕をやったり、小僧を性の慰み者にしていたかなど、見聞したことを忌憚なく語っている。

西洋人が理想化したチベットと、現実がいかにかけ離れているかは、当時のチベットの現実を記した本書を見れば明らかである。中国共産党によるチベット侵攻と文化大革命により、チベット仏教の寺院の多くが破壊され、ダライラマ十四世をはじめとする高僧の多くがインドに亡命し、チベット人の信仰が弾圧されたのは事実だが、悲惨な状況にあった人民が解放されたという側面は否定できないだろう。

セライ・アムチーと呼ばれた河口慧海は、日本人であることが露見し、決死のチベット脱出を敢行した。あえて間道を選ばず、数日でいくつもの関所を通過し、無事にインドに逃れたのだが、チベットで世話になった前大蔵大臣らが罪を問われてい

ると聞き、ダライラマ十三世への上申書の提出を、ネパールの総理大臣に依頼すべく奔走する。ようやく願いがかない、帰国するところで三年に及ぶ旅は終わる。

十年後、河口慧海はふたたびチベットを訪れ、数多くのチベット語の経典や、植物標本、民俗資料などを持ち帰る。この時の記録は『第２回チベット旅行記』として刊行されているが、チベットが鎖国を解いていたこともあり、最初の訪問の時のような、息を呑む冒険譚はない。

あとがき

ここにまとめた紀行は、僕がまだ三十代半ばの頃、中国チベット自治区を旅したときに残した日記をもとにしている。大学生の時に空想していた夢の国に、実際に足を踏み入れた時の驚きは大きかった。しかも、片言の中国語しか分からなかったのだから。ただ、少人数での行動が可能だったので、団体旅行における煩わしさは感じずに済んだ。

清朝の末期、河口慧海が訪れた頃のチベットは鎖国状態で、外国人の入国は厳しく禁じられていた。慧海は日本に伝わっていない仏典を求めて、清国人に偽装して密入国したのである。

今や飛行機でいきなり、ラサのクンガ空港に着陸できる時代

である。いくら交通の便が良くなっても、政治的な混乱で外国人に扉が閉ざされることがある。また、平穏な時期であっても、空気の薄いチベット高原では、体を慣らしていくのは容易ではない。高山病の危険と隣り合わせであるのは、慧海の時代と変わりないのである。

　中国の文化大革命によって、チベット仏教は壊滅的な被害を受けた。そのためだろう、修復された寺院は仏像や壁画の新しさが目立ち、時の流れによる積み重ねというものが感じられない。また、後期密教の経典で説かれているような、神秘体験ができるわけでもなく、チベット独特の葬送、鳥葬が行われる場所も、外国人の立ち入りが禁止されている。印象に強く刻み込まれたのは、ヤルツァンポ川の雄大な流れと、突き抜ける青空、

ひとたび風が吹けば砂嵐が起きる岩山だった。中国化されたラサの町よりも、旅の前半に回ったツェタンとその周辺に、チベット人の生きた姿を見た気がした。

　僕が訪れたのは一九九九年だが、二〇〇六年には、青海省の西寧（せいねい）からラサ（拉薩）に至るまでの青蔵鉄道が開通した。中国化の波はさらに加速度を増している。僕が目にしたチベット人の習俗も、やがては日常から消え去ってしまうかもしれない。内蒙古のモンゴル人や東北地方の満州人が、今では内地の中国人と同化してしまったように。

　今では遠い記憶となってしまったチベットだが、その思いに対する率直な気持ちを表す題名を探した。それが『懐かしのチベット』である。最後に今回の旅の日程を記しておこう。

一九九九年七月三十一日〜八月七日

一日目
　成田発…西安経由…成都泊
二日目
　成都発…クンガ空港…ツェタン泊
三日目
　蔵王墓…ユムブ・ラガン…タントゥク寺…ツェタン泊
四日目
　サムイェ寺…ヤムドゥク湖…ラサ泊
五日目

　デプン寺…ノルブリンカ…ジョカン寺…バルコル…ラサ泊
六日目
　ポタラ宮…セラ寺…バルコル…ラサ泊
七日目
　クンガ空港…成都経由…西安泊
八日目
　大雁塔…華清池…兵馬俑…西安発…成田着

二〇一六年四月二日

髙野敦志

今回の改訂では「チベット入国者の先駆け」と「河口慧海の『チベット旅行記』について」を増補した。中国に併合される以前のチベットがどのような状況にあったか知る上で、重要な資料を紹介した。それらを読むことによって、西洋人が理想化してきたチベットが、実態とかけ離れていたということも理解できるだろう。

二〇二六年二月二十二日

髙野敦志